KYOKYO 133

特　集　Kyo²の魅力を発信する　京都教育大学の広報活動

特　集　6 年制教員養成高度化コースが発足します

京都教育大学

＜表紙＞

『俺たちは、どろぼうだ！』（学校祭の劇）

附属特別支援学校小学部５年　川上雄大

学校祭の劇「ブレーメンの音楽会」で音楽会場に忍び込むいたずらっ子の役をやりました。「おれたちは、どろぼうだ！」元気よくさけぶ、しましま服のいたずらっ子たち。「これ、〇〇くん！」「袋、投げたよ！」にこにこしていろんなお話をしながら描きました。

＜裏表紙＞

『竹で描こう！』

附属特別支援学校小学部６年　本田桃子

「せいかつ」の時間に自分たちで切った竹をつかって描きました。いろんな色を選んで、絵の具をつけてスタンプみたいにポンポン押したり、棒を差し込んで転がしたり。割れた竹で描くと笑ってるみたいで、自分もにこにこ笑いながら描きました。

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation
NIAD-UE
UNIVERSITY
ACCREDITED
Mar.2013

CONTENTS

広報第133号

＜表紙＞　附属特別支援学校小学部5年　川上雄大
＜裏表紙＞　附属特別支援学校小学部6年　本田桃子

特集

2 **Kyo²の魅力を発信する京都教育大学の広報活動**
学長補佐（広報担当）
国文学科教授
浜田　麻里

5 **6年制教員養成高度化コースが発足します**
教育学科教授
6年制教員養成高度化コース主任
村上登司文

海外見聞録

9 **第8回東アジア教師教育国際シンポジウムに参加して**
社会科学科教授
香川　貴志

留学生の声

11 **日本で忘れられない1年間になりました。**
研究留学生
ゲオワラー・ジェッサダー
（タイ出身）

研究余滴

13 **激動の英語教育と小学校英語の行方**
英文学科教授
泉　惠美子

京教今昔物語

15 **京教大とともに歩いた、41年と11ヶ月**
会計課長
宇野　和樹

京教学内探訪

18 **「京教焼」**
―ホームカミングデー記念品制作裏話―
美術科准教授
丹下　裕史

附属学校園だより

20 **リニューアルした附属桃山小学校**
附属桃山小学校副校長
西井　　薫

21 **附属桃山中生徒の活躍の場が拡がりました**
ーグラウンド改修ー
附属桃山中学校副校長
藤原みつる

22 **“園内清掃”**
～めざせ！きらきら・ぴかぴかようちえん～
附属幼稚園副園長
斎藤真由美

新任の先生から

23 **数学という自由なアートを通して**
数学科准教授
横山　知郎

卒業生の声

24 **学び続ける姿勢が自分を成長させる**
舞鶴市立城南中学校　教諭
四方　優貴

24 **学び、よくよく遊べ。**
大阪府立富田林支援学校　教諭
上峠　泰子

ようこそ大先輩

25 **“自信”をつける、付けさせる一つの方法**
京都教育大学名誉教授
元理学科有機化学など担当
沢田　誠二

読者の皆さまへ・編集後記

27 地域連携・広報委員会委員長
細川　友秀

Kyo²の魅力を発信する京都教育大学の広報活動

学長補佐（広報担当）
国文学科教授　浜　田　麻　里

京都教育大学では、平成25年度、広報担当の学長補佐が置かれました。以下では京都教育大学の広報活動について、本学のマスコットキャラクターである「そったくん」と浜田によるヴァーチャル対談をお送りします。

＊＊＊

浜田（以下、「浜」）：そったくん、いつも京都教育大学のイメージアップにがんばってくれてありがとう。そったくんは、平成18年6月1日に誕生した[注1]んですよね。

そったくん（以下、「そ」）：はい。もうすぐ8歳になります。

そったくん

浜：それにしては、まだひなのままだけどね。

そ：まあまあ、そういう細かいことは気にしないで。

浜：でも、全国のゆるキャラブームの火付け役は彦根市のマスコットキャラクター「ひこにゃん」だと言われるけど、ひこにゃんが誕生したのは平成18年4月でほとんど同じ時期だから、本学は先見の明がありましたよね。

そ：はい。だから私を産んでくれた京教のために少しでも役に立てたらうれしいと思ってるんですよ。ところで、浜田さんは広報担当になったそうですけど、広報っていったい何をするんですか？大学の宣伝ですか？

浜：そうですね。広報ってなんだかわかったようでわからないところがありますね。

　広報は英語のPublic Relationsの訳で、19世紀末から20世紀末にかけて米国で発達した概念らしいんです。

そ：あ、広報のことをＰＲって言うでしょ？それはこのPublic Relationsの頭文字のＰとＲを取ったもの？

浜：さすがそったくん！禅を勉強してる[注2]だけあって鋭いね。ある組織が活動するときには、その組織を取り巻く周囲の人達や関係する他の組織、いわゆるステークホルダー達といい関係を作っていくことが大事なんですよね。そういう関係を作るために必要な考え方や行動の仕方がパブリック・リレーションズと呼ばれているんです。

そ：なるほど。いい関係というのは、たとえば企業だったら、自社の製品をどんどん買ってくれる、いいお客さんを増やすってことなんですか？

浜：とんでもない。企業がただ荒稼ぎをするとか、消費者がただやみくもに安いからとかいう理由で製品を買うというのはいい関係とは言えないですよね。まず、両者の間に信頼関係が築かれていること。この企業はいい商品を作ってくれる、また反対に、うちの顧客はうちの商品のよさを理解して買ってくれているという双方向の信頼関係が大切です。本学であれば、地域や学校から「京教はいい教員を養成している」と信頼されたり、京教の教育理念を知って受験してくれる志願者なら「きっといい教員になってくれるだろう」という期待ができたり…ということになるでしょうか。

　双方向ってことだから、こちらから情報を発信するだけではなく、相手からの情報を集めることも大切なんですよ。狭い意味の広報を情報の発信だとすると、情報の収集は「広聴」と呼ばれています。相手が本学をどう評価しているか、あるいは本学にどんな期待を持っているかといったことを知ること、もっと言うと、ステークホルダーの声を聞き、その声を本学が自らの活動に生かす姿勢を持っていること、それが信頼関係の基礎です。広報よりも広聴の方が大切だと言う人もいます。

そ：うわあ、なんか広報のイメージ変わったなあ。

浜：米国有数の広告企業Burson-Marstellerの創業者で、90歳を超えたいまも現役のハロルド・バーソンが1973年にコロンビア大学大学院で行った講義があるんだけど、その中で広報担当者には4つの役割があると言っています。

（1）センサーとしての役割
社会の変化をいち早く感じ取って客観的に分析し、首脳陣に変化の影響を伝えなければならない。

（2）良心としての役割
組織の役員よりも一般社会の人々の利益に敏感である必要がある。

(3) コミュニケーターとしての役割

組織内部のコミュニケーションがうまくいっていなければ、対外的なコミュニケーションはうまくいかない。例えば、首脳陣が新たな方針を打ち出したとき、改革がうまくいくかは、なぜその改革が組織にとって重要なのかを構成員に理解してもらえるかどうかに掛かっている。なお、外部に対しては、組織がつねに責任ある行動を取っていることを知ってもらう必要がある。

(4) モニターとしての役割

組織が一般社会からの期待に十分応えているかをモニターし、そうでない場合は新しい方針を打ち出すよう首脳陣に求めていく必要がある。

そ：へえ。広報の仕事って、本当に広い範囲をカバーするんですね。大変そうですねえ。

浜：そうなんですよ。でもね、これは広報活動全体としてこういった役割を果たしていくということであって、だれか一人とか、どこかの部署が全部を担うということではうまくいかないと思っているんです。これからは、京教の教職員も、学生も、「全員が広報担当者」という考えで、みなさんの力を結集して進めていけたらなあと思ってます。

そ：うわ、私も広報担当者ですか！

浜：もちろん！そったくんの活躍の機会はますます増えていくと思います。期待してますよ！！実は、昨年、広聴活動の第一歩として教職員対象にアンケート調査や聞き取り調査をしたんですが、たくさんの人から貴重な意見やおもしろいアイデアをもらえたんです。みなさん、だれが広報担当になっても大丈夫じゃないかと思ったくらいです。大学では、昨年度、企画調整室の下に「広報戦略検討専門委員会」を作って広報戦略を話し合うことにしたんですが、教職員の声は広報戦略を決めるときの重要な資料になったんですよ。

そ：私は、一番大事な構成員は学生だと思っているんですよ。私をいちばん愛してくれているのも学生達ですからね。学生達の意見はどうやって広報活動に反映していったらいいんでしょう。

浜：いい指摘ですね。実は今年度取り組みたいと思っているのもその点なんです。京都教育大学の学生達は一見、「まじめで大人しそう」というイメージが強いんですが、一人ひとりを見ると、心優しい、いい人が多いし、いろいろな活動にチャレンジするパワーも持っています。こういう学生達のいいところをぜひたくさんの人に知ってほしいですね。

　そういえば、いま学生達がそったくんのクッキーを作ってるんですって？

そ：そうなんですよ。昨年夏休み前に学生と教員の有志が「そったくんクッキープロジェクト」を立ち上げました。毎週ミーティングを繰り返して、私のキャラクターデザインを使ったクッキーを開発しているところです。11月の藤陵祭では試作品の販売もしました。制作にあたっては地域にある障害者福祉施設の京都いたはし学園さんに全面的に協力をお願いしています。クッキープロジェクトを通じて、障害者の就労に対する理解も広まったらいいなあと思って…クッキーには「京都らしさ」もイメージに盛り込んで、今年度は大学グッズとして生協で販売することを目標にがんばっています。

浜：どんなクッキーになるの？

そ：いえいえ、それはまだ企業秘密なんで…、発売を楽しみに待っててください。

写真 1「そったくんクッキープロジェクト」メンバー（一部）

　クッキー以外にも、ステークホルダーとの信頼関係作りを目的にした新しい活動が始まっているんでしょう？

浜：はい。昨年度はまず卒業生との新しい関係作りを目指して「ホームカミングデー」の改革を行いました。地域連携・広報委員会のメンバーが中心になって、ホームカミングデーに在学生が大学の「いま」の姿を先輩達に紹介する「Home Coming 10×20」のコーナーを作ったり、卒業して10年、20年…など節目に当たる卒業生に重点的に声を掛けて集まっていただくようにしたり、参加していただけたら必ず楽しんでいただける企画をたくさん用意しました。懇親会ではゴスペルサークルのメンバーがライブをしてくれたんですが、最後のアンコール曲の「ふるさと」が歌われたときには、いっしょに歌を口ずさみながらちょっと目頭が熱くなっている人もいらっしゃったみたいです。現在の大学の姿を卒業生のみなさんに知っていただけただけではなく、卒業生と現役学生との心の通った交流として、大変意味のあるひとときを持つことができたのではないかと思っています。

写真2　ホームカミングデー懇親会で「卒業後？十年」の節目に当たる方に集まっていただくテーブルを設けました

　あと、ふれあい伏見フェスタもさらにパワーアップして開催される予定です。ふれあい伏見フェスタは1年に1回、桜が満開になる4月にキャンパスを地域の方に開放して、大学を身近に感じていただく貴重な機会になっています。より多くの方に来ていただけるように、今年は成人対象のプログラムもいくつか新しく企画し、学生達と一緒に地域の方をお迎えする準備を着々と進めています。

そ：ホームカミングデーでもふれあい伏見フェスタでも、学生が大活躍ですね。

浜：そうですね。そうやって大学の大先輩や地域の方々とイベントを通じて交流させていただくことは、学生にとってまたとない学びの機会にもなっています。いまの子どもたちは異年齢、異世代の人達との交流が苦手だと言われていますね。それは異世代・異年齢交流を体験する機会が少ないことが理由だと思います。本学の学生ももちろん例外ではありません。これも社会環境の変化の結果なので、若者だけを責めても仕方ありませんよね。でも大学でのさまざまな体験を通じて、地域にも貢献できるし、学生達も成長できる…というふうになったら、まさしくこれこそが双方向のコミュニケーションにほかならないと思いませんか？

そ：なるほど…広報の目指すところがちょっとだけ見えてきた気がします。

浜：他にも、京都教育大学のことを地元の人達にももっと知っていただきたいということで、最寄り駅のＪＲ藤森駅、京阪墨染駅にそれぞれ案内標示を設置しました。

　本学は小さいけれどきらっと光るすてきな大学だと思っているんです。広報活動を通じて、まずはたくさんの方にその魅力に気づいてもらえたらと思っています。

写真3　案内標示（墨染駅前）

写真4　案内標示（JR藤森駅前）

＊＊＊

注1　「そったくん」は京都教育大学創立130年記念として公募により決定された。

注2　「そったくん」の由来は以下の通り。

　禅の教えに「啐啄同時（そったくどうじ）」という言葉があり、卵がかえろうとするまさにその時、ひな鳥が内側から殻をやぶろうとして殻を吸うことと親鳥が外側から殻をつつくことが同時に行われるという意味です。つまり教育における相互関係の重要性を表しており、本学学長室にはその書（山内得立元学長揮毫）が掲げられています。

　このひな鳥は子どもたちであり、いずれそのカラをやぶるお手伝いをする教育大生自身の姿でもあります。

　「そったくん」は、京都教育大学が「自分でカラをやぶろうとする子どもたち」を育てる教育者を養成する大学であることをシンボル化しています。

6年制教員養成高度化コースが発足します

教育学科教授
6年制教員養成高度化コース主任　村　上　登司文

平成26年4月より本学に「6年制教員養成高度化コース」が新設されます。6年制教員養成高度化コースは、教育学部4年間と教育学研究科の2年間とを組み合わせた6年一貫の教員養成を行うコースであり、本学にとって新しい試みです。京都教育大学の教育研究評議会（2013.3.14）と教授会（2013.5.15）の審議を経て、6年制教員養成高度化コースの設置が決定されました。この4月から発足することになりましたので、その概要についてご紹介します。「6年制教員養成高度化コース」の名称が長いので、以下の記述では「6年制コース」または「コース」とします。

6年制コースを開設する背景

近年は社会が急速に変化しており、教員養成大学においてもそれに対応することが緊急の課題となっています。国の教育方針に影響を及ぼす中央教育審議会の答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の向上方策について」（平成24年8月）において、現在の学校では多くの課題に対応することが必要と書かれました。取り上げられたのは、いじめ・暴力行為・不登校など生徒指導上の課題、特別支援教育の充実、外国人児童生徒への対応、ICTの活用など、多岐に渡っています。このような現代的な教育課題には、たとえ新卒教員であっても、ベテラン教員と同じ様に、一人の教員として適切な対応が求められます。

教育現場で実践的指導力を適切に発揮するためには、直面している教育課題を理解し、多角的な視点から捉える力があり、周りの教職員・保護者と協力して課題を解決する力やコミュニケーション力が必要です。そして社会の発展に応じて、子どもの学びの質を高める教科の指導力を持つことが、教員に求められています。

このように教育課題が多様化・複雑化する中で、新卒教員に求められる資質や能力は高くなっており、学部4年間だけの教員養成期間では充分といえない状況になってきました。平成24年8月の中央教育審議会の答申では、教育学研究科修士課程の改革による教員養成の修士レベル化について述べられました。教員養成の社会的使命を担う京都教育大学は、「6年制教員養成高度化コース」を設けることで、今後の国による教員養成改革に伴う制度的な変化に対応しようと考えています。つまり、本学の6年制コースの新設は、教員養成の高度化に向けて、制度的に最良な対応を探るパイロットスタディ（先導的研究）と位置づけられます。それと同時に、修了生の教員就職率を向上させることが目指されます。

なお、国立教育大学における類似のコースとして、愛知教育大学の「6年一貫教員養成コース」（平成18年度開設）、東京学芸大学の「新教員養成コース」（平成20年度開設）があります。両大学ともに、すでに新コースが開設して5年以上が経っています。愛知教育大学ではコースの定員に満たないこと、東京学芸大学では優秀な学生は4回生の時点で採用試験に合格して卒業すること、などが課題となっています。両大学ともに新コースの運営に課題はありますが、その経緯と現状から学ぶ所が多いといえます。本学の6年制コースでは、コース所属学生を確保し、コース修了時の教員採用を増やすことが、今後の目標になります。

コースのメリット

6年制教員養成高度化コースには、次の4つのメリットがあります。

①学部3回生の段階から、教育学研究科への進学を視野に入れて学修することができます。
②教員になるための準備に、6年間という充分な時間をかけることができます。
③教職や教科教育が抱える課題について、より高度な実践的指導力を育てることができます。
④経済的メリットとして、コース所属の学生は、教育学研究科受験時の「検定料」と、教育学研究科への「入学料」の約30万円が免除されます。

実践的指導力の向上

6年制コースは、教育学研究科のすべての専修への進学に対応しています。原則として学部の専攻と同じ専門領域である教育学研究科の専修に進学することになります。本学には、京都の国立私立8大学の連合による連合教職実践研究科（平成20年に開設）がありますが、6年制コースはそこへの進学には対応していません（図1を参照）。それゆえ、6年制コースが教育

学研究科に接続していることが、大きな特徴です。つまり、教育学研究科には教科教育専修が10専修設置されているので、6年制コースでは学部から大学院まで続けて、教科に関する高度な専門的内容を学修することができます。

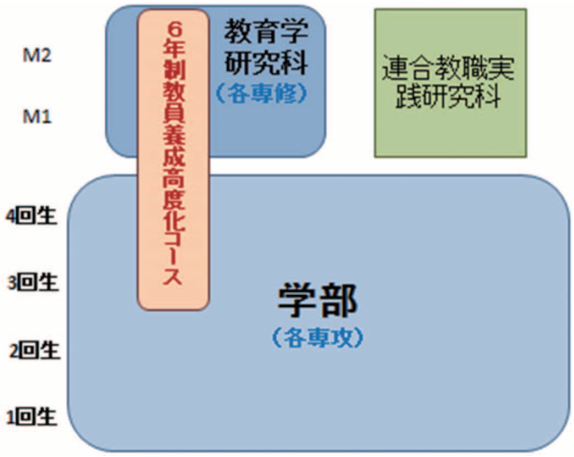


図1　6年制コースの研究科との関係

6年制コースは、教育学部の各専攻での学習と研究を基盤として、より豊かで確かな実践的指導力を育成することを目指します。コースでは、教育課題対応力、コミュニケーション力、研究遂行力を高めることにより、実践的指導力を向上させます。

第一の「教育課題対応力」は、教員として学校現場で出合う様々な課題について情報を収集して課題を分析し、解決方法を試みようとする前向きな姿勢です。教育課題には、教科指導、生徒指導、校務分掌などにおける様々な課題が含まれます。

第二の「コミュニケーション力」は、学校の教職員と共に働く同僚力の基礎であり、困ったときに支援を求め、その一方で他者を支援する力となります。コミュニケーション力は、子どもたちを理解し、保護者や地域の人々と交流する力の基礎です。

第三の「研究遂行力」は、日々の教育実践の中に研究課題を設定し、この課題について研究を行い、そして研究報告の文書作成およびプレゼンテーションする力です。この研究遂行力の育成のために、6年制コースでは3つの段階を通ります。コースでは学部と院を合わせた4年の時間を生かして、ホップ（卒業論文の作成）、ステップ（修士1年次に「実践論文」の作成）、ジャンプ（修士2年次に修士論文の作成）の3つの段階を経て研究遂行力をみがきます（図2参照）。学校現場で今求められている「研究ができる教員」の素養を育成するのが6年制コースの大きな特徴です。学部の段階から院への進学を視野に入れて卒論研究を行い、修士1年目で教員インターン実習を基に実践論文をまとめ、最終学年では、研究レベルが高い修士論文の作成を目指します。この研究遂行力が実践的指導力の大切な要素となります。

図2　研究遂行力の向上

学部と教育学研究科をつなぐ教育課程

6年制コースでは、困難な教育課題に対してもしなやかでくじけない、学び続ける教員の養成を目指します。コースでは、学部と大学院の6年間に渡る教員養成課程に、学部3回生の段階で大学院への進学を視野に組み入れ、学生自らが課題意識を持って学修する環境に導きます。コースの学生は、より長期的な視点を持ち、深い教養や高い専門知識を修め、より豊かな自己形成を行うことによって教育課題に対応する力を養います。

学部と教育学研究科に、新設科目と既設科目とを組み合わせてカリキュラムを編成しました。学部段階のコース必修科目は5科目です。3回生の前・後期に「6年制コースゼミⅠ」と「6年制コースゼミⅡ」を新設します。コースゼミⅠでは、6年制コースへの理解を深めるとともに、現代的教育課題について、ディスカッションやアクションリサーチを通して、実践的指導力の育成を図ります。コースゼミⅡでは、具体的事例を基に教育実践の研究方法について理解し、課題に応じてフィールドワークを行います。また、大学院進学後の研究を視野に入れて、学生自身のこれからの研究について構想を練ります。

学部4回生では、コース学生は大学院の授業を先行履修し（自分の学部の専攻に対応する教育学研究科の専修の授業）、大学院における教育・研究のイメージをつかみます。また、学校現場の教育課題を学び確認するために、京都府と京都市の協力を得て、「教育課題研究実地演習」（京都府公立学校で演習）、または「学校インターンシップ研修」（京都市立学校で研修）のどちらかを履修します。

教育学研究科に進学後のコース必修科目は2科目で

す。その一つの「教職実践研究」では、各自の教育課題を出し合い、それぞれが得た実践知を交換します。1年次後期には「教員インターン実習Ⅰ」を履修し、学部段階から追究してきた教育課題を検証し理論化することを目指します。「インターン実習Ⅰ」が行われる後期は、先の「教職実践研究」の時間が、学生相互に各自の実習についてアドバイスする協働の時間となります。修士1年次において、教育実践研究を基に実践論文を作成します。6年制コースでは、教育課題について教育実践場面で検証し、それを基に理論化を進め、理論と実践の往還を図ります。

学びの共同体としてのコース

コース学生は、3回生時に6年制コースに所属しても、現在の専攻への所属はそのまま変わりません。つまりコースに入ることは、現在の専攻所属に加えて、6年制コースにも所属することになります。コースへの申請が認められてコースに所属した学生（コース学生）は、学部の通常カリキュラムに併せて、上記のコースカリキュラムを履修する必要があります。

6年制コースでは、異なる専攻のコース学生と協働的な学修環境をつくり、各自の教育課題の解決を目指す中でコミュニケーション力の育成を図ります。学部の3回生の段階から組織的で体系的なカリキュラムにより、学生が自ら課題意識を持ち主体的に学修にのぞみ、協働的に課題を解決できる学修環境をつくります。専攻や志望学校種を異にする学生同士で議論を行う学びの共同体を形成します。デジタル時代だからこそ実際に集えるラーニングコモンズ（学びのための共有地）を活用し、学生のコミュニケーション力の伸長を目指します。

コースの募集と選考、及び大学院への進学

6年制コースは、1学年での募集人員は3回生時に約10名です。教育学研究科修了後に教員になるという強い意志を持っていることが、コースへの所属申請の第1条件です。学生は2回生後期に、学部卒業後に教育学研究科へ進学することを決め、コース所属を申請します。

各専攻で行われるコース所属申請者の選考基準として、次のものが必要です。①教育学研究科を修了した後に教員になる強い意志。②現代社会の教育課題を発見し、その解決に向かおうとするチャレンジ精神。③コース学生集団による協働的な探究活動への参加意欲。④2回生前期までの学修状況から見た学習・研究能力、などを有することが選考基準になります。

コース学生の大学院進学は、ハードルが軽減されます。コース学生は、教育学研究科の入学者選抜試験と同じ時期に「進学者選考」を行います。「進学者選考」は、通常の入学者選抜試験とは異なり、口述試験のみを行います。6年制コース運営委員会からの推薦は、3・4回生時のコースカリキュラムの履修状況と、教育学研究科での研究計画に基づきます。つまりコース学生においては、コースカリキュラムを履修すれば、4回生の9月に行われる選考試験が口述試験のみになります。このように、6年制コースに所属すれば、大学院への進学見通しがほぼ立つことになります。

学生の期待を乗せて

京都教育大学の「6年制教員養成高度化コース」は、教育学部と教育学研究科がカリキュラムの上でも、進学面においても制度的につながっています。教員就職率向上を6年制コースの運営目標に入れながら、いかにすれば高度な資質・能力を身につけた教員を養成できるかを試行します。6年制コースは、本学内の教育状況の改善を図りながら、ベストな制度的対応を探る重要な役割があり、その意味で成果をあげる必要があります。

表1　コースカリキュラムの科目構成と単位数

学年	時期	授業科目など	単位区分
学部3回生	前期	「6年制コースゼミⅠ」（新設）	必修2単位
	後期	「6年制コースゼミⅡ」（新設）	必修2単位
学部4回生	前期	教育学研究科の単位の先行履修	必修2単位（進学予定専修の授業科目）
	後期	教育学研究科の単位の先行履修	必修2単位（進学予定専修の授業科目）
学部3・4回生	後期	「教育課題研究実地演習」（京都府）	選択必修2単位
		「学校ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ研修」（京都市）	
教育学研究科1年次	通年	「教職実践研究」	必修2単位
	後期	「教員インターン実習Ⅰ」	必修2単位
教育学研究科2年次	前期	「教員インターン実習Ⅱ」	推奨2単位
	後期	※	

※　教育学研究科2年終了時に修士論文の6年制コース報告会を実施する。

6年制コースでは、実践的指導力の基礎として、教育課題対応力、コミュニケーション力、研究遂行力を育成し、高度な知識技能を身につけた教員の養成を目指します。それにより、しなやかでくじけない、学び続ける教員を養成します。教育学部に入学した学生達の教員になりたい夢を、教員になる志に仕立て、それを叶える教育実践力の育成を目指すコースです。新6年制コースの設置によって、高度な資質・能力を身につけた教員の養成を目指しており、私達は教員になりたい強い意欲のある学生を待っています。

6年制教員養成高度化コース

学部4年と大学院2年（教育学研究科）を組み合わせた6年間一貫の教育を行うコースを、平成26年4月に開設します。

図3　2回生向けの6年制コース学生募集のパンフレット

平成26年4月の開設に向けて、昨年の12月11日に2回生の学生を対象としてコース説明会がありました。説明会に参加した学生が書いた感想用紙には、学生達によってコースへの期待が多く書かれました。コースへの期待が書かれた感想をいくつかご紹介します。

○大学院進学をしたいと思っていたので、3回生から大学院を見通して学べるので嬉しい。教育の理論と実践とを結びつけて学んでいける。文章、プレゼンテーションの作成能力、資質の育成が行えるのでこの6年制コースで学んでいきたい。

○6年制コースを通して、具体的な教育課題を自ら見つけて、議論を積み重ねながらがすすむ形にはとても魅力を感じた。

○10人という少人数でグループでディスカッションをしたりして、考えを深めるのは期待している。

○4年間で教職の場に出るのに不安であったので、コースは不安を解消していくことができそうだと思った。

一方で、コースについて不安な点も書かれました。

○大学院に進学するか、どの校種の教員になるかすら明確に定まっていないので、もっと考えてから決める。

6年制コースに応募する学生達の期待を乗せて、また京都教育大学の教員養成大学としての使命を受けて、平成26年4月より、6年制教員養成高度化コースが発足いたします。

第8回東アジア教師教育国際シンポジウムに参加して

社会科学科教授　香川貴志

去る平成25（2013）年9月24日から27日まで、中国東北部の吉林省の省都である長春を、表題の会合のため位藤紀美子学長と共に訪問した。今回のホスト校は、中国の国家重点大学に指定されている東北師範大学であった。おもに中等教育以上の段階の教員を多数輩出してきた名門校である。

長春は日本各地からの直行便が極めて少なく、我われが現地入りした9月24日には、東京学芸大学の一行も北京経由で長春空港に到着した。出迎えのマイクロバスに東京学芸大の参加者と同乗し、空港から市街地に入った。長春は、多くのビルがライトアップされ、ネオンがいたるところで賑やかに点滅しており、現代中国を象徴する典型的な都市景観であった。ホテルに投宿した時、関西空港を発ってから既に10時間を超えており、長旅に疲れを覚えた。

一夜明けた25日の朝8時30分から宿舎内のホールで開会式（写真1）と基調講演が行われ、若干の休憩ののち、中国東北部の教師教育モデル“UGS”モデルと実践の紹介が、東北師範大学の劉益春学長からなされた。UGS（University-Government-School）は、大学と幼小中高の教育連携を地方行政機関が全面支援するシステムである。この契機となったのが2007年に中国政府が打ち出した教員養成教育の無償化であり、とくに東北部の場合は貧困層が多い農村部において教育のレベルアップを図ることが重要な政策目標に定められた。その教師教育（再教育を含む）の拠点となっているのが東北師範大学である。

このシンポジウムに参加した国・地域は、ホスト国の中国のほか、日本、韓国、台湾であった。学長が参加した日本の大学を50音順に列挙すると、愛知教育大学、大阪教育大学、京都教育大学、上越教育大学、東京学芸大学、奈良教育大学、北海道教育大学、宮城教育大学、以上の8大学であったが、これらの他にも数大学からの参加があった。

25日の午後は、午前中のUGSモデルの実験校への訪問が行われた。訪問先は中国と韓国、台湾と日本の2グループに分かれ、前者は東豊実験区、後者は双陽実験区を訪問した。日本が訪問した双陽実験区は、長春の中心市街地からみて南南東に約45kmの旅程にあり、貸上バスで1時間を要した。途中では車窓から長春郊外における住宅地化の最前線を観察することができた。最近の中国大都市の例に漏れず、超高層住宅がドミノのように並び、都市部への人口流入と人口増加がうかがえる。中心市街地の連担が途切れると、地理の授業で取り上げられる中国東北部の農業地域「大豆、トウモロコシ地帯」らしい景観が展開し、地平線が見えるほどの広大な農地に大陸の広さを実感した。

双陽実験区に到着すると、農地の中に忽然と現れた高層住宅街の一画に目的地の長春市第151中学があった（写真2）。先生方や生徒たちの歓迎を受け、実験校の概略説明を受ける。この学校は、中学校と高等学校を一緒にした中等教育学校に相当する。しかし、大学附属学校ではなく、長春市立の公立学校である。中高一貫教育は中国ではごく一般的であるため、実験校ではあるが第151中学は特殊な学校ではない。

教育実習は一人の実習生が6つの指導案で12コマ

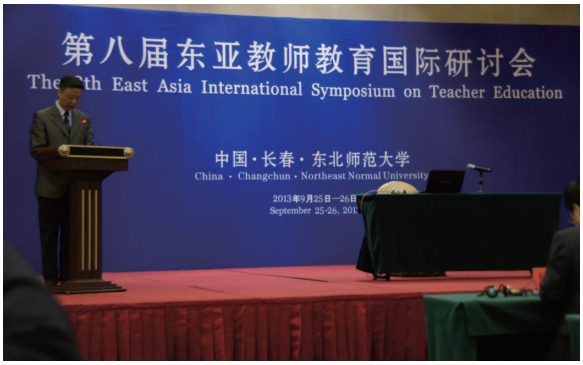


写真1　会場演壇のようす
中国語表記を翻訳すると「第8回東アジア教師教育国際シンポジウム」となる。（2013年9月25日、香川貴志撮影）

写真2　UGS実験校の長春第151中学
建物は比較的新しい5階建で、玄関前は舗装された広場になっていた。（2013年9月25日、香川貴志撮影）

の授業を実践する。実習生の指導は、1名の実習生につき中学教員1名と東北師範大学教員が各1名ずつ専属で付くので、日本の教育実習と比べると格段に密度が高い。大学教員が教育実習へ積極的に関わるシステムが構築されており、中等教育と高等教育とが刺激し合いながら連携発展を図れるようになっている。

我われは、化学と地理のいずれかから選んで参観することとなった。私は人文地理学が専門なので、迷わず地理を選択した。授業のテーマは「季節に応じて変わる昼夜の長さ」、授業担当は女子実習生であった。声に張りがあり、生徒を適宜指名しながらテキパキと授業を進める姿からは、かなり周到な教材研究を経ていることが簡単に分かった（写真3）。

地球の自転軸の傾きと公転軌道をオリジナルの教具（写真4、グループで着座している生徒たちの各テーブルにも同様のものがある）、そしてＰＣによる教材提示を組み合わせた授業展開は、ビジュアルであり水準が相当に高かった。終了後、我われ参観者も交えた研究会があり、活発な討論を楽しんだ。宿舎に帰着後、東北師範大学主催のレセプションが催された。

翌26日は、午前中に教員養成に関わる大学（台湾教育大学、東京学芸大学、大阪教育大学）からの報告があり、午後は5つのセッション（小中学校教員養成、小中学校教員の専門発展と研修、教員養成担当教員FDと教学研究、教員管理者FDとFDモデル、大学院生研究発表）に分かれての分科会があった。

写真3　地理の教育実習（研究授業）のようす
テーブルに分かれてグループ学習の形態をとっていた。クラス定員は約60名と多い。（2013年9月25日、香川貴志撮影）

写真4　地理の教育実習（研究授業）で使われた教具
昼の部分が白、夜の部分が黒、太陽の照射角が赤矢印で表現され、黒い部分に取り付けられた赤矢印を一緒に動かすことができる。（2013年9月25日、香川貴志撮影）

位藤学長は校務（翌日の教授会）のため、私は見送りを済ませて午前中の会議に臨んだ。そして許しが得られたため、正午前から長春の市街地に遊んだ。人文地理学の研究者として都市構造を体感するためである。中国訪問は10回前後に及ぶので不便は感じなかったが、旧満州国時代に新京と呼称された街を歩くのは、慣れた上海を逍遥するのとは違った緊張感があった。

私の街歩きはトータルで12km近くに及んだ。中でも強い印象を与えられたのは、満州時代に日本が建築した公共建造物が多く残る新民大街の景観である。日本の手による残存建築物は、大半が「偽満〇〇」と称され、銘板が歴史を物語っている。点在する満州時代の建物の中には、現在の附属京都小学校の本館に類似した建物もある（写真5）。書物やネットで調べると、帝冠様式（まれに興亜帝冠様式）と呼ばれるようだ。

建物の写真を撮っていて、いきなり老人から日本語で話しかけられて驚いた。反日感情が強い人であれば厄介なことになると直感したが、その老人の口調は誇りと品格に溢れていた。「日本は中国人からみると随分悪いことをした。でも良いものも残してくれた。この建物も、あそこの建物も日本が建てた。市電に乗りましたか？あれも日本が作ったものです。」

私は教えてもらった路面電車に乗った。運賃は0.9元と非常に安い。街路樹の中を走る車窓からは活気のある商店街が望めた。しかし、地図と照合して終着まで乗る予定が途中で下車を余儀なくされた。高架道路を建設中でスペース確保のため運転休止区間があったのだ。そこから槌音激しい埃っぽい道路を歩き、軽軌（新交通システム）とバスを乗り継いで宿舎に戻った。発展著しい長春が瞼に焼付いた。既に肌寒さを感じる9月下旬の長春に夜の帳が下りようとしていた。

写真5　吉林大学第一医院（満州時代の軍事部）のメインビルディング
1935年に竣工したこの建物は、その様式が現在の附属京都小学校の本館（1938年竣工）と類似している。この時代に流行した帝冠様式（日本古典様式と西洋古典様式の折衷）というデザインを基調にしているように見える。この建物の屋根末端は、反り上がっており、中国古典様式も付与されている。こうしたものは、興亜帝冠様式と呼ばれることもあるようだ。（2013年9月26日、香川貴志撮影）

日本で忘れられない1年間になりました。

研究留学生　ゲオワラー・ジェッサダー
（タイ出身）

タイのチェンマイから参りましたゲオワラー・ジェッサダーと申します。ニックネームはナットです。2012年の9月28日から日本へ来ました。京都教育大学で、1年半の間、研究留学生として留学することになりました。外国へ行くことは私にとって夢でした。1年半日本に住むことは初めてです。

最初は日本人と話したときは、日本語があまり分かりませんでした。特に関西弁の聞き取りはよくできなかった。でも日本人と友達になって、そのおかげで、日本語が前より上手になってきました。また、自分も日本語を勉強して、日本人と話すことが増えてきてからどんどん日本語と関西弁を聞き取ることが出来るようになりました。

日本ではごみを捨てる前に分別しなければならず、また、ごみを捨てる日も決まっています。タイではそういうことがないので、最初はちょっとめんどくさいと思いましたが、よく考えたらこれはとても環境を守るいい方法です。もしタイでみんなそういうことができれば、とてもいいと思います。

また、電車に乗ることは、電車の時間や乗換えがあまり分からなかったから、大変でした。電車に乗れなくて予定に間に合わないし駅の表示が日本語なので迷うことになりました。でも今は日本人が紹介してくれた携帯のアプリがあるので、とても便利です。また京都のバスはすべてのバス停無線で後何分でバスが来るかすぐ分かるので、凄いなと思いますよ。料理の味でも驚くことがありました。タイの味付けはたいてい濃い味ですが日本の味付けはタイ人にとって薄いので、最初は口に合いませんでしたが、薄い味付けは体にいいと思うと食べられるようになりました。特に今は寿司が好きです。タイにも寿司がありますが日本の寿司のほうがフレッシュだと思います。

1年半の間にいろんな体験ができました。例えば、弓道と茶道と活花など、特にプロ九段と囲碁をやりました。日本の文化の中では、私は囲碁に一番興味を持っています。また農業実習で、田植えを体験しました。タイは農業の国と聞きましたが、私にとってタイで田植えを体験したことないですから、今回はとてもいいチャンスでした。実験・実習でいろいろな和食料理と中華料理などを体験し、他のタイ人の留学生のみなさんとタイ料理などを、一緒に勉強した日本人に紹介しました。また国際交流会館に住んでいる留学生と日本人と一緒に「おたべ体験土道場」でおたべを作りました。

京都は景色が綺麗な所で、特に秋は紅葉がとても綺麗です。京都周りのいろんな所へ友達と観光できました。（例えば、八坂神社、伏見稲荷神社、清水寺、東大寺など。）また京都教育大学から留学生のためのツアーに参加して、留学生の皆さんと担当の先生と観光しました。また、東京と広島と沖縄と北海道など観光できました。特に沖縄へ行ったときには沖縄の人々の顔がタイ人ととても似ていることに驚きました。東京へ初めて行ったときバスで予約して一人で行って、そのときはまだ日本語をあまり聞き取れなくてどきどきしました。

日本に来てから気づいたことは、日本人は勉強するときと、働くときは皆が本当に一所懸命するということです。次に気づいたことは、私が知っている日本人は皆、スケジュールノートを持っているということです。私にとって日本人は予定が多過ぎると思っています。また、日本人はサービスするのは大事なことと気づいていて、私は、日本は一番だと思います。さらに、習慣や文化など日本人は大事にしていると分かりました。休みの日は日本人特に女性がよく着物を着て有名な神社やお寺など観光しています。お祭りの時も祇園祭などは毎年盛大にしています。私にとって日本人は働くときは厳しいですが、仕事が終わったら、本当に優しいです。

そして大学で日本の教育課程を勉強している間に日本とタイの違いがわかりました。具体的に日本の教育課程は10年ごとに改訂される長い期間のプロジェクトですが、タイでは政府によって教育課程が変わります。なので、たいてい2年間ぐらいで教育課程が変わってしまいます。ですから良い教育課程かどうか長い期間に続けてみないと分かりません。私はタイの教育課程は日本みたいにしたほうがいいと思います。

そしてタイと日本と違うことはもちろん文化が違います。私は日本人の暮らし方、考え方、話し方（考え方の影響で）、ルールをきちんと守ることがタイと違うように思いました。日本人は何をやってもいつも急いでいます。私は時々どうしてそんなに急ぐのか分かりませんでしたが、日本に生活していろんなことを勉強してどんどん慣れてきました。「世界で日本はよく頑張る国と言われています」というのは、日本に住んだら分かります。

最後に、長いように思って短い1年半でした。指導教員の佐々木先生を始めとする多くの人にサポートしてもらってとてもありがたかったです。日本に戻るチャンスがあったら是非また来たいです。

激動の英語教育と小学校英語の行方

英文学科教授　泉　惠美子

英語教育の動向

最近、新聞などで英語教育について論じられることが多く、議論の対象となっている。特に2013年12月13日に文部科学省（文科省）によって発表された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」は記憶に新しいが、小学校に関しては、現在小学5、6年で領域扱いである「外国語活動」が「英語」として教科になり、週3コマ実施され（その内1コマは15分のモジュールで週3回実施）、小学3、4年で外国語活動を週1～2コマ実施するとしている。外国語活動は、現在は担任が主となり、外国語指導助手（ALT）や日本人英語教員（JTE）とティーム・ティーチングで指導しているが、5、6年で正式な教科になると専科教員を積極的に活用するとしている。今後中央教育審議会の答申、学習指導要領の改訂、2018年度の先行実施に向け検討が始められ、2016年にも新学習指導要領が出る可能性がある。これは、「総合的な学習の時間」に国際理解の一環として、あるいは体験的な活動として外国語を取り扱ってきたことからの大きな転換であり、各方面で大きな衝撃を与えているが、教員養成大学である本学も早急に取り組むべき課題は多い。

また、文科省は来年度より世界と戦えるグローバルリーダーを育てる新しいタイプの高校を目指して、「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」を全国で100校指定し、英語力だけでなく、幅広い教養や問題解決力も身につけた生徒の育成を促し、その予算として20億～30億円程度を概算要求に盛り込むとしている。さらに、高校に続き、中学校でも英語の授業は英語で行うとされ、現在は週4コマの指導で国語の時間数よりも多くなっている。このように英語教育が重視されるねらいは何であろうか。

2011年6月に、文科省から「『国際共通語』としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」が出され、かつての「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想・行動計画」と異なり、「国際共通語」という言葉が使われるようになった。21世紀に入りグローバル化が進み、英語はもはや欧米の言語ではなく、世界の人々が共通して用いる言語であるとの認識である。その内容は、「生徒に求められる英語力について、その達成状況をCAN-DOリストなどで把握・検討する。生徒にグローバル社会における英語の必要性について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図る。ALT、ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす。英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育の改善。グローバル社会に対応した大学入試の改善」などとなっている。

2013年には、「グローバル人材育成推進のための初等中等教育の充実」「教育再生実行会議の提言」などで、英語を使って世界で活躍できるグローバル人材の養成を重視し、小から大まで一貫した取り組みが必要であるとされ、TOEFLを大学入試に用いるといった驚くべき提言もなされている。キーワードは、グローバル社会に対応した人材、すなわち、使える英語といった語学力以上に、日本人として自分の国や文化・伝統について外国人に説明ができ、質問にも答えられる人材育成、交渉能力や合意形成能力なども含んだコミュニケーション能力の育成、最終的には地球温暖化や持続可能な発展など世界共通課題に対して地球市民として文化や考え方の異なる人とも協力して問題解決に取り組む人材を養成するために、小学校から大学までの英語教育を充実させるといったところである。

諸外国の英語教育の現状とカリキュラムと到達目標

ところで、諸外国の英語教育の現状はどうなっているのだろう。韓国、台湾、中国などの東南アジア諸国では、国策として外国語教育を推進しており、小学3年（大都市では1年）より英語を教科として指導し、4技能を含めたスキルの習得、つまりコミュニケーション能力の基礎づくりと異文化理解の両方を目指している。タイでは小学1年から教科として指導しており、中国では9段階の到達目標を示したカリキュラムがあるなど、小学校から高校卒業まで一貫したナショナルシラバスと到達目標が明記されている。韓国の英語村には日本を含む諸外国からも多数研修に訪れている。

また、ヨーロッパ諸国では、多言語多文化主義を推奨し、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR: The Common European Framework of Reference for language: Learning, Teaching, Assessment）が示され、実生活で活用できる内容がCan-doで記述されている。また、ヨーロッパ言語ポートフォリオも使用され、母語以外の言語教育が早期から実施されている。それは、EU諸国が旅行やビジネス、教育などで

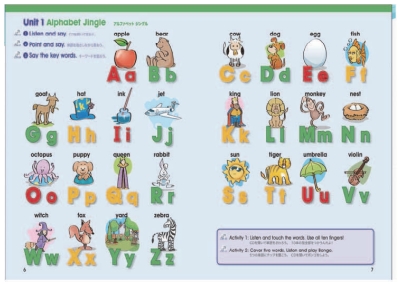
つながり、二度と戦争を起こさないといった決意の裏返しでもあろう。

いずれも日本と比べて非常に高い到達目標が設定されているが、それは、我が国の小学校外国語教育の到達目標がスキルよりも国際コミュニケーション力をより重視するという考え方に基づき、学習指導要領において、コミュニケーション能力の素地の育成が目標となっているためである。しかしながら、教科になれば自ずと目標は高くなり、現在中学校以降の外国語科の目標であるコミュニーケーション能力の育成へとつながっていくであろう。だが、小学校ならではの指導目標、教材、指導法でなければならない。

第二言語習得：外国語を通して育てたい資質・能力

子どもが外国語を獲得する際には、母語同様に大量の良質なインプットが必要である。つまり、目標言語に浸ることと、それらを取り込むことが大切であり、周囲の大人や仲間との本物の意味あるやり取りを通して言語を使い、確認をしながら間違いを指摘してもらったり訂正したりして、徐々に使えるようになるのである。そこで初期の段階は、聞くことが中心で、曖昧さに耐えることが求められる。絵本やまとまった文脈の中で意味を推測しながら楽しんで英語を聞き、理解しようとする姿勢が大切である。また、歌やチャンツなども活用し、英語特有の音やリズムに慣れ、身体を使って音と言語の意味概念を繋げ理解することが求められる。その後、自ら考えて文を産出し話せるようになるのは時間がかかる。読む・書くは更に負荷がかかり、特に日本語と大きく異なる言語システムを持つ英語を簡単には習得できないということを心に留めたい。

大阪市では昨年の9月より「学校活性化推進事業英語イノベーション」として重点校で小学1年よりフォニックス（音と文字をつなげる指導）を導入し、DVD付き歌や絵本、英語表現を用いたコミュニケーション活動と併用しながら音声指導を担任中心で行っている。これらは今後の教科化における指導のヒントとなろう。

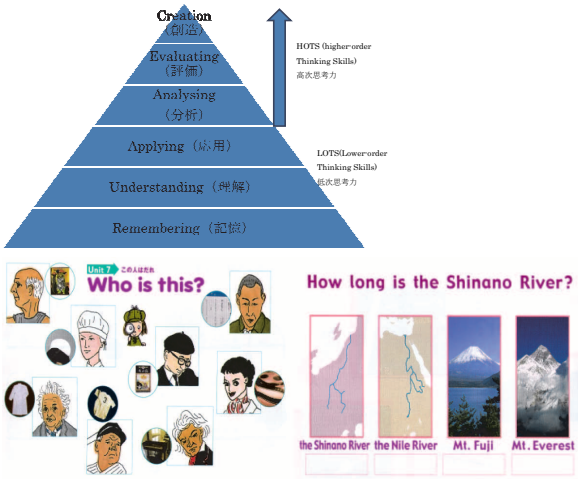


フォニックス指導用教材（*WE CAN! PHONICS*）より

教科化に向けて考えておくべきこと

今後小学校で英語が教科化されるためには、多くの解決すべき課題がある。まずは専科教員の養成を急ぐとともに、小学校教員免許取得希望者に、他教科同様、少なくとも初等英語科教育法および初等英語科内容論等、計4単位を履修させる。また、小学校の現職教員には、指導力向上と英語運用能力向上を主な研修内容としながら、中学校の英語教員も小学校で教えられるように研修を行ったり、民間から小学校英語教員として必要な資質や能力があると認められた者には、研修を実施し、専科教員として指導できるよう、教育職員免許法等の改正を視野に入れた措置が必要であろう。

また、小中高の一貫した到達目標も明記したナショナル・カリキュラムの作成、優れた教材の開発、指導法や評価の研究なども不可欠である。特に敏感な耳と柔軟な心を持つ児童に言葉の教育をすると共に、小学校の全人教育における外国語教育の位置づけを考えることが重要である。また、国際コミュニケーション能力とは何か、どう育てれば良いのか、学習方略や動機づけ、自律性なども視野に考えなければならない。最近では、教科科目などの内容と言語（ことば）を統合した学習であるCLIL（Content and Language Integrated Learning）が世界で広がり、日本でも取り入れられている。子どもに興味のある題材や他教科で学習した内容を英語で教えることにより、他教科横断型学習にもなり、担任も取り組みやすい。CLILでは4つのCが重要な要素であるが、その内の一つ認知も次の図のように高みを目指すことが望まれる。



他教科関連教材（*Junior Columbus*：光村書店）より

さいごに

「教育とは、ことばを育てること。ことばを育てるとは、人間を育てること」は国語教師大村はま先生の言葉である。外国語を教えることは子どもたちに日本語と異なる言葉の窓を通して世界を見せることであり、豊かな心と深い思考を育てることである。将来、世界の平和と人類の幸福のために貢献でき、世界の人々と違いを認め合い、課題に対して共に協働できる人材を育成したい、そのような子どもを育てる言語教師を養成したいと願い、微力ながら研究と実践を続けている。

京教大とともに歩いた、41年と11ヶ月

会計課長　宇　野　和　樹

【はじめに】

原稿依頼を受けて何を書いたら良いのか迷いましたが、採用から定年まで経験したそれぞれの職場での思い出や出来事などを、記憶をたどりながら紹介させていただくことにしました。

◎　昭和47年5月1日　～　昭和49年3月31日

大学に採用になって最初の職場は「附属高等学校」でした。高等学校を卒業して最初の勤務でしたので、事務室窓口に通学証明書や在学証明書等の申し込み等に生徒が来ますが、私と年令も変わらないため、当初は戸惑ったこと（自分の高校時代の延長のようで）を覚えています。また、大学の仕事内容も知らないまま、附属高等学校の仕事をすることになり、しばらくは大学との仕事の関係等（担当課等）がなかなか理解できずに、当時の皆様には何かとご迷惑をかけたことと思っています。

《 昭和47年度は、次のような人員構成でした。 》

・『大学（附属学校園を含む）には、大学教員123名、附属学校園教員132名、事務系職員144名の教職員399名が在籍していました。人数は、（非常勤職員を除く）概要より』

◎　昭和49年4月1日　～　昭和53年5月31日

「会計課用度係」で、契約関係等を担当することとなりました。当時は、物品請求書の様式に大学教員や事務職員等から手書きで提出され、それを元に発注して納品後に支払伝票を正副の様式にカーボン紙を挟んで、手書きで作成していました。また、特に記憶に残っているのが、農場の生産物の売り払いを担当していた時のことです。農場には実験用の牛がいましたが、年度末に牛が殺されるところから解体されるまでを確認（検収）し、それを翌日競りにかけて売り払うというものでした。4年間経験しましたが、検収に立ち会った後は、しばらくは肉が食べられなかったことを記憶しています。

＊昭和50年4月1日に保健管理センターが設置

◎　昭和53年6月1日　～　昭和62年12月20日

「庶務課庶務係」で、課内の勤務時間関係、公文書の処理や教授会等を担当し、また、学長、事務局長の会議出席や出張関係等も担当していました、特に、経験した人はもう数名だと思いますが、大学・附属学校・農場では宿日直（平日と土日）勤務がありました。当時大学では、現在の教員連絡室の所に宿日直室があり、2名勤務で郵便物等の接受や電話の応対等を行っていましたので、その勤務割り振り等も担当していました。また、現在公文書等はパソコンで各自が作成していますが、昭和56年以前は、公文書は専任のタイピストがおられましたので、決裁後に依頼してタイプされたものを使用していましたが、昭和62年頃から「ワープロ」が各課に1台導入され、公文書等もワープロで作成するようになって行きました。昭和57年5月1日からは「同課人事係」で、教職員の採用、退職及び諸手当関係等を担当することとなりました。当時は、給与計算は手作業からコンピューター（オフコン）処理へと移行し、京都大学がセンター校となり京都、滋賀、奈良地区の各大学の給与計算を集中処理して各大学とオンライン（電話回線）でデータ等を送受信していました。また、使用するプログラムについては、各課で業務ごとに事務職員が「コボル言語」等で作成及び修正して、電算処理をしていました。そのため、要員養成が必要となり毎年研修会が開催され、夜食を食べたり門を乗り越えて帰ったりしながら、遅くまで研修を行ったものでした。このような経験をされた人は、現在もう主査以上の方だけになりました。

＊昭和55年4月1日に附属教育工学センターが附属教育実践研究指導センターに転換

＊昭和59年4月1日に教室事務室が統合

◎　昭和62年12月21日　～　平成2年9月30日

「学生課教務係」で、最初の教務システムの導入に携わりました。カリキュラムが複雑でなかなか理解できずに、当時の教務係の方々に助けてもらいながら、時には夜遅くに門を乗り越えて帰ったり、何度も徹夜をしたことを思い起こし、『あの頃は若かったんだなぁ』と改めて感じています。

また、業務が電算化されるまでは、学籍簿や成績証明書等は、すべて手書きで作成をしていましたので、各教員氏名や各授業科目名のゴム印の中から該当するものを探し、それらを押印しながら作成していましたので、必ず読み合わせを行いチェックしたものでした。

＊昭和63年4月1日に総合科学課程が設置
＊平成2年4月1日に大学院教育研究科（修士課程）が設置

◎　平成2年10月1日　～　平成5年3月31日

「学生課入学試験係」で、係長になり入試業務に携わりました。当時は現在のように多数の入試が無かったので、10月頃から翌年の3月までの半年に、専攻科、外国人留学生、大学入試センター試験（昭和54年から平成元年までは、共通一次試験）と学部入試の4種類だったと記憶しています。ただし、受験生の数は現在よりは多く試験室も12室から15室程度必要であり、共通講義棟、1号館と2号館の全ての講義室を使用していました。また、その試験室の清掃、蛍光灯の交換や机と椅子の点検等は、学生課職員の助けを得て行っていました。昔は試験の前日等は、担当者を含む複数の者で大学に泊まって、試験問題や試験室等の管理等をしていた頃もありました。ただし、現在と同様で入試業務は、『かなり気を使う業務だなぁ』と思って仕事をしていたことを思い出します。平成4年9月から、学校週五日制が実施され、月1回第二土曜日が休日となりました。

＊平成4年4月10日に附属環境教育実践センターが設置

◎　平成5年4月1日　～　平成7年7月31日

「会計課出納係」で、支払い関係の業務に携わりました。初めて小切手を扱ったときは、金額の桁が大きくて、ドキドキしながら慎重に作成し押印したものでした。当時は、大手筋にある日銀の代理店の京都銀行に、支払いや給与等の支払いがあるたびに必ず小切手を持って公用車で往復したものでした。また、窓口では検定料、入学料、授業料や寮費等を現金で収納していました。現在は、全てがコンピューター処理になったことと、振り込みや引き落とし等を利用することにより、現金を扱うことは必要最小限になりました。平成7年4月から、学校週五日制は第四土曜日も休日となり月2回となりました。

＊平成6年2月1日に情報処理センターが設置

また、大学では平成8年6月1日には、開学120周年記念式典・祝賀会が、約500人の参加者を得て盛大に行われました。

●平成7年1月17日に、6,434人が亡くなられた阪神・淡路大震災発生

◎　平成7年8月1日　～　平成10年3月31日

「附属図書館総務係」で、初めて図書館司書の方と一緒に仕事をすることを経験しました。当時から、図書館の新築や増改築の構想があり、運営委員会委員の先生方と司書の方と一緒に、私学の図書館を見て回りました。しかし、大学に戻って図書館の規模の違いに愕然とするばかりでした。現在は、ようやく長年の願いがかない学生等が利用しやすい機能的で広くて明るい図書館になりました。また、図書館時間外開館の勤務を担ってくれた在学生の非常勤職員の人達と現在も交流が続いていることは、私の宝物の一つとなっています。

◎　平成10年4月1日　～　平成15年3月31日

「会計課情報処理係」で、今までのオフィスコンピューターからパーソナルコンピューターに移行する時期を経験し、情報機器の進歩について行けない思いをしたものでした。

また、学内でシステム開発や運用等が必要な課等から情報処理係に1名を研修生として1年間在籍しながら要員養成を行い、翌年には担当課等に戻るというシステムをとっていたことを思い出します。いつの時代においても、要員の養成については苦労していました。

平成14年4月から、完全学校週五日制になりました。

＊平成12年4月1日に附属教育実践研究指導センターは附属教育実践総合センターに　転換

◎　平成15年4月1日　～　平成17年3月31日

「会計課総務係」で、法人化に向けての準備作業に追われる毎日でした。特に、四大学（滋賀大学、滋賀医科大学、京都工芸繊維大学、京都教育大学）再編・統合の構想が当時はあり、法人化に向けて財務会計システムを共同調達したことや、規程等の改正を四大学で会場を持ち回りしながら、会計課職員と情報処理担当職員が合同で検討し作成しました。結果的に、再編・統合はならなかったのですが、沢山の仲間が出来たことは、その後の仕事上においても有意義なものとなっています。

＊平成16年4月1日に国立大学法人京都教育大学が設立（国家公務員から法人職員となる）

◎　平成17年4月1日　～　平成19年6月30日

「教務課課長補佐」として、初めて課長を補佐する立場になり課内や他課等の調整に携わることを経験し、コミュニケーションの取り方や仕事の調整について、いろいろと悩んだことを記憶しています。また、教育後援会関係の仕事を担当することとなり、保護者

の役員等の方々と接する機会が増えたことは、今の仕事の上でも役に立つことが多く、良い経験をさせてもらったと思っています。平成18年8月1日から、係体制からグループ制へと移行し「教務課教育グループリーダー」として、グループを取りまとめることとなりました。グループ制が導入され8年が経過しますが、うまく機能しているのでしょうか？。

＊平成18年4月1日に総合科学課程が学校教育教員養成課程へ統合改組

＊平成19年4月1日に附属養護学校が附属特別支援学校に改称

◎　平成19年7月1日　～　平成22年7月31日

「附属学校事務長」として、直接附属学校園に行って話を聞かせてもらいながら、校園長、副校園長、事務職員等から現場での問題点を聞きながら、その対応策を一緒に検討し現在附属学校園が抱えている現状を大学に要求事項として伝え、1件でも問題解決ができればと、走り回っていたことを懐かしく思い出します。当時の事務部職員には、ほとんど席にいなかったので、ご苦労やご迷惑をかけたことと思っています。

＊平成19年7月1日に附属特別支援教育臨床実践センターが設置

＊平成20年4月1日に大学院連合教職実践研究科（専門職学位課程）が設置

＊平成22年6月17日に「京阪奈三教育大学連携推進協議会設置要項」が制定され、　三大学の学長が調印

また、この頃に青天の霹靂のような事件があり、精神的にも苦悩する日々が続く中、信頼回復に向けて全学が一丸となって取り組みました。

◎　平成22年8月1日　～　平成26年3月31日

「会計課長」として、大学の予算管理・運用や契約関係等を総括することになりました。特に全国的にかなり厳しい予算状況が続く時代で、2年間の給与減額が行われたその中で、大学会館の改修工事、図書館の増築・改修工事や附属学校等の改修工事があり、予算のやりくりで皆様にはご理解とご協力をいただいたことに感謝すると共に、ご迷惑をおかけしたことと思っております。また、来年度からは以前から要望があった女子寮の改修が始まりますし、これからも教育研究支援や学生等学習環境改善等のための予算の確保が必要となり、また一方では適切な予算執行が求められますので、引き続きご理解とご協力方よろしくお願いいたします。平成25年8月1日に、事務組織の再編が行われ現在に至っています。今後この再編がうまく機能し、大学の教育研究及び運営面で底力となることを願っています。

＊平成22年8月1日に附属教育実践センター機構が設置

＊平成23年8月1日に教育資料館が設置

＊平成24年10月1日に京阪奈三教育大学連携推進室発足

＊平成25年12月18日に教員養成分野のミッションの再定義結果公表

《 平成25年度は、次のような人員構成でした。》

・『大学法人（附属学校園を含む）には、役員4名、監事2名、大学教員122名、附属学校園教員161名、事務系職員85名の教職員368名が在籍しています。人数は、（非常勤職員を除く）概要より』
昭和47年の頃と比較して、定員削減の影響で現業職員（運転手、守衛等）が現在では全て請負等になりました。

●平成23年3月11日に、15,884人が亡くなられ、2,600人余りが行方不明になられている東日本大震災発生

【おわりに】

今回、足跡をふり返らせていただく、良い機会をいただいたと思いながら、『採用から退職まで京都教育大学一筋に勤めたんだなぁ』と、改めて感じながら書かせていただきました。もっと、いろいろなことがありましたが、きりがないのでこの辺で終わります。

つたない文章でかつ読みにくいと思いますが申し訳ありません。また、記載した内容は私の記憶によるものであり、間違った記述があるかも知れませんが、お許しください。

私は、4月からは再雇用と両親の介護生活になりますが、微力ではありますが、もう少しだけ京教大と歩き続けさせていただきますので、今後とも、よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、これからも大学にとっては、厳しい大変な時代が続きそうですが、全教職員が協力され教員養成に尽力し、すばらしい人材を育てられ京都教育大学がさらなる発展を遂げられますことを祈念しております。

長い間お世話になり、ありがとうございました。

「京教焼」
―ホームカミングデー記念品制作裏話―

美術科准教授　丹　下　裕　史

陶芸小屋

大学の北側にある医療センターとの境、トレーニングセンター前からさらに北に野道を入っていったところに通称「陶芸小屋」があります（写真①）。正確には陶芸実習室ですが、草むらの中の単独の小さな建物の風情から、皆「小屋」と呼んでいます。年配の美術科OBの方に聞くと、そのままの場所で木造の当時から名実共に「陶芸小屋」と呼んでいたそうです。建物はコンクリート造に変わっていますが、今でも1970年代の電動ロクロは現役で動いていますし、学芸大や師範学校の刻印が押された道具類も残っています。

写真①　陶芸小屋

ここ数年、卒業生と大学の交流行事であるホームカミングデー（以後、HCD）の記念品をこの陶芸小屋でつくらせていただいています。HCDに出席された方なら“道草工房”という名前を覚えていらっしゃるかもしれません。陶芸ゼミの学生有志が、毎年10月はフル回転で制作に当たっています。制作に当って大切にしているのは、「卒業生と大学を繋ぐものづくり」で、大学由来の要素を取り入れた「京教焼」の器をつくることにしています。本稿では、この「京教焼」の制作裏話について綴っていきたいと思います。

大学構内の土は焼物に使えるか

焼物というと、まず「土」です。焼物に適した土がなければ始まりません。緑が多い構内ですので土は容易に見つかりますが、露出している土は大抵黒っぽい色をしています。これは枯葉などの有機物を多く含む土で、残念ながら焼成に耐える土ではありません。運動場の土は砂分が多く、可塑性がほとんど無いので形を作ることができません。焼物には、熱に耐え、可塑性がある粘土が必要なのです。

大学のある深草周辺には「大阪層群」という粘土層を含む地層群があり、その地名は古くは鎌倉時代から土器の産地として記録に残っています。大学北東の伊達町交差点近くには色壁土を製造している工房がありますし、そこから北へ名神を越えたあたりには瓦町という地名を見る事ができます。さらに伏見人形は土人形としてとても有名です。深草は、古くから土と結びつきの強い土地柄なのです。となると大学構内でも粘土が採れるのではと期待が膨らみますが、そう簡単には見つかりません。近年の改修工事で地面が掘られている現場をいくつか覗いてみましたが、それらしい地層は見ていません。

はじめてHCDの記念品の依頼を受けた時、ゼミの学生と話し合い、「大学で作った」ではなく、「大学から生まれた器」をコンセプトに制作を進めることにしました。そして既にその制作見通しはある程度立っていました。つまり粘土が採れるであろう場所の見当は概ねついていたのです。写真②がその場所です。後ろに見えるのは陶芸小屋、左手は合宿所です。大学の敷地の一番北側、合宿所前の空地に求める土は眠っています。ここをショベルで20～30㎝掘ると、黒い表土の下に礫を含んだ黄土色の土が見えてきます。この土を握り締めると、手のひらの形が土の塊に残ります。（写真③）。柔らかいというより、しっかりとした手応えの粘りにコシを感じる土です。正確には、粘土ではなく粘土質の土と言った方がよいと思います。これを採集し、水に溶いて水簸すると適度な可塑性のある粘土が出来上がるのです（写真④）。最終的に焼物に適した土かどうかは高温で焼いて調べなくてはなりませんが、1230℃で酸化焼成したところ赤褐色に問題なく焼き上がり、十分な耐火性があることがわかりました。私たちは、この土を「京教土」

写真②　合宿所前空地

写真③　採集した土（約4kg）

写真④　水簸して出来上がった粘土（約1.7kg）

と呼んでいます。ただ、あくまでも粘土質の土なので、水簸して粘土にすると掘った土の半分も残りません。ホームカミングデーの記念品制作では大量の粘土が必要です。当初は市販の土に混ぜて使うことも考えましたが、薄まって効果がわからなくなるので、京教土は素地土には使わず、より直接的な効果が期待できる釉薬の原料として使うことにしました。

釉薬をつくる

陶芸小屋の東側も空地になっていて、学内で剪定された木の枝などの廃棄場所になっています。これらを授業やワークショップで行なう野焼きや黒陶窯の焼成の燃料に使わせてもらっています。例えば、野焼きをすると後にはかなりの量の灰が残ります。この灰を水簸して精製すると、釉薬の原料になります。植物の灰が釉薬の原料になるということはよく知られていることです。灰に含まれるカルシウム等が釉薬の骨格となるシリカやアルミナを熔かす役割をするのです。HCDの記念品の釉薬にこの灰を使わない手はありません。私たちはこの灰を「京教灰」と呼ぶことにしました。

この原稿の依頼を受けたのは昨年の秋、学内の紅葉がとても美しい時期でした。特に給水塔前のロータリーから敷地北端のクラブボックスあたりまで道に点在する楓（タイワンフウ）の紅葉はすばらしく、高く抜けた青い空と楓の紅葉がそれはそれは見事なコントラストを見せていました（写真⑤）。面白いのは、一本の木が上から少しずつ色をつけて自然のグラデーションになっていることです。その様子が昨秋は特に美しかったと思います。年末になるとほとんどの葉が散ってしまい、今度は道が落葉の絨毯に覆われます。構内清掃のおじさんの「掃いても掃いてもいたちごっこや」という愚痴を聞くのもこの頃です。少々話が脱線してしまいましたが、今回この楓の落葉を灰にしてみました（写真⑥、⑦）。

写真⑤　楓のすばらしい紅葉

写真⑥　90ℓゴミ袋に3袋分の楓の落葉を灰にする

灰を水簸し、沈殿させ、上水を除くと、濃い灰液ができあがります。この灰液を京教土の泥とある割合で混ぜ合わせると、もっとも原始的な釉薬が出来上がります。土の主成分はシリカとアルミナですので、そこに灰のカルシウム他が入ることによって、伊羅保という伝統釉に近いものになります。

写真⑦　燃え残った灰
左のレンガを円筒形に積んで炉にした

京教焼

写真⑧は、歴代のHCD記念品です。土はそれぞれの釉薬に合わせた市販の土を使っています。左端は京教土と京教灰を合わせ伊羅保調の釉にしたものです。中央は京教灰と長石を主成分とする調合で、ほんの少し黄み帯びた艶消しの釉調になっています。右端は青白磁釉の調合の一部を京教土に置き換えたもので、土に含まれる鉄分が青磁の深い発色を生んでいます。

写真⑧　歴代のHCD記念品

そして写真⑨の右側の器が、先述の楓の灰と京教土を合わせて作った灰釉を京教土の素地の上に掛けた、純粋な「京教焼」楓灰釉バージョンです。京都教育大学の、この大地から生まれた焼物です。

写真⑨　京教土の素地に、楓灰釉を掛けた純粋な京教焼（右）
左は信楽土の素地に同じ釉薬を掛けたもの

最後に裏話をもう一つ。京教土がどうしてあんな平坦で浅いところから採れるのかという疑問を持たれた方はなかなか勘のいい方です。今は草に覆われてわからなくなっていますが、実はあそこは今から15年程前、大学から大亀谷を東へ数百メートル登ったところにある附属特別支援学校の作業棟新築工事の際出た残土が埋め立てられたところなのです。（特別支援学校の敷地は地形的に谷間になっており、もしかしたら粘土質の土の層を見つけることができるかもしれません。）同じ大学の敷地の土からできた焼物なので、「京教焼」ではないと言わないで下さいね。

リニューアルした附属桃山小学校

附属桃山小学校副校長　西　井　　薫

京都教育大学附属桃山小学校の本館（1・2年教室、全特別教室、職員室、給食室、会議室、校長室）は、築40年以上経っていました。床のピータイルはあちこち剥がれていましたし、建て付けの悪い扉は、名人芸でないと開閉できないものも多くありました。また、休み明けに水道栓をひねると赤茶けた水が出てきたり、給食室前の下水道が詰まったりと老朽化が進んでいました。そこで毎年改築を申請していましたがなかなか難しく、施設課からはあと数年後になるでしょうと言われていました。それが政権交代と同時に、急に工事に着工することになりました。長年要求していたことが通ったことは非常にありがたいことでしたが、あまりにも急だったので、すぐに対処しなければならないことがたくさん出てきました。まず、1・2年の子どもたちの教室をどうするかという問題がありました。2学期というと暑い夏から寒い冬まで気温の変化が激しい時期です。子どもたちの教室環境をなるべく快適なものにと考え、2年教室はランチルームに、1年教室は野外実習室にしました。エアコンのなかった野外実習室には、家庭科室よりエアコンを移設して、涼しくそして温かく過ごせるようにと考えました。また、子どもたちの給食をどうするかについてもいろいろと悩みました。お弁当にするのか委託給食にするのかという問題がありましたが、保護者の方々の負担を考え委託給食にしようと決めました。幸い、京都小中学校の中等部が委託給食にされていたので、早速給食参観をさせていただきました。そして、業者の工場見学をして安全面、衛生面の確認をしました。それから、トイレの確保も大切なことでした。工事中使えるのは体育館のトイレのみになるので、これは仮設トイレに頼るしかないと判断しました。下水道に流せる場所に設置することで解決しましたが、かなりの費用がかかりました。しかし、絶対に必要なものをはずすことはできません。そこで、百万円ほどかかるといわれた仮設トイレの屋根はブルーシートで代用することにしました。撤去してしまうものにはなるべくお金をかけず、少しでも子どもたちのために使える設備に回そうと考えたからです。その最たるものが職員室でした。プレハブを建てることも考えましたが、それだけで多額の費用がかかると聞き、何とかしようと決心し、体育館に職員室スペースを作りました。そこで体育館は、物置、図書、多目的、職員室と4つのスペースになりました。しかし体育館は、夏には38度にもなるのにクーラーはなし、冬には0度になるのにエアコンなしのストーブのみで過ごしました。完成して元の職員室に戻り、天井が近くにあることの幸せを痛感しました。工事の進行については、電気業者がなかなか見つからず、工事開始が1か月近く遅れてしまいました。しかし、附属桃山小学校では1月に入試、そして2月に研究発表会を開催することになっていて、必ず12月中に完成していただくことが第一のお願いでした。施設課の方々そして業者の方々が必死で取り組んでくださいました。休みも返上し、夜も遅くまでの工事でした。工事が夜中まで続くこともありました。そして12月30日工事は終了しました。1月の4日、5日は全教職員が冬休みを返上して、引っ越し業者と教職員で新校舎に移りました。たくさんの箱を開け、整理していくことは大変なことでした。しかし、無事に新校舎で1月6日の3学期始業式を迎えることができました。この工事でいろいろな変化がありましたが、一番大きく変わったのは教室の場所が変わった3年生です。教室が2階の理科室の場所に移り、1年から5年の教室が1階と2階になりました。そして3年生の教室のあった場所を多目的室として使うことになりました。今までオープンスペースはランチルームだけでしたが、もうひとつオープンスペースができたことで子どもたちの活動の幅が広がります。そして、全ての特別教室は新しくなり、機能的で美しくなりました。廊下や部屋の色もカラフルで学習への意欲が高まります。また、1年、2年、3年の教室は壁と扉が動き、参会者の多い研究発表会の時はオープンにできる仕組みです。平成26年2月21日の文部科学省研究開発指定最終年の研究発表会（新教科「メディア・コミュニケーション科」の創設）では、新しい校舎で全国からの参会者をお迎えし、子どもたちの素晴らしい姿を見ていただけることだと思います。

附属桃山中生徒の活躍の場が拡がりました
ーグラウンド改修ー

附属桃山中学校副校長　**藤　原　みつる**

京都教育大学附属桃山中学校は生徒一人ひとりに活躍できる場があり、その活躍を認めあえる仲間のいる学校づくりをめざしています。本年度も、文化・体育の両面で活躍する生徒を数多く輩出し、多くの表彰を受けています。表彰を受けることは、単に結果の善し悪しだけを問題にするのではなく、練習のプロセスや仲間との心のつながり、一人ひとりの特性の発揮・努力など多面的な環境や要素との結びつきが反映されたものといえます。努力を惜しまない生徒、友だちの活躍を認めあえる仲間、そして生徒の活躍を支える教員の存在がこの多くの表彰を生み出しています。

さて、本校では、平成19年から22年にかけて校舎の耐震改修工事を行い、新しい設備を持った快適な学習環境を整えました。一方の体育活動面の場の充実という点では、体育館が平成7年に新築されたものの、グラウンド改修が本校の念願となっていました。

本年度そのグラウンド改修の念願が叶い、平成25年11月末に、水はけのよい地面と高さのある防球ネットが完成し、存分にスポーツ活動に打ち込める環境が整いました。 12月には、新生グラウンドのお披露目となる、生徒会主催の球技大会が開催され、グラウンド完成の喜びに浸りました。この球技大会では、前日に生徒会の本部役員や専門委員会委員が準備を行い、当日は、多くの生徒が審判や記録係、得点係、整備係となって会の運営を支えました。

一方、本校の伝統行事である第43回陸上競技大会でも、自己記録の更新に向けて努力するだけでなく、生徒たちは、前日にはライン引きやフィールド競技等の準備を、当日には観察、招集、出発合図、集計、放送等を行い、大会を運営しました。本校では大会の運営に生徒自らが関わることで主体的・社会的態度を養わせています。

このように、本校では対外的なコンクール等で賞を受けるだけではなく、生徒一人ひとりが活躍でき、また活躍を認めあえる場となる行事を意図的・計画的に実施しています。今回のグラウンドの誕生により、生徒の成長を後押しする重要な行事が充実することになります。また一つ学習環境が整備されたことを大変うれしくまた有り難く思います。

ここ数年運動系部活動の活躍はめざましく、水泳部は全国大会に出場して、男子400Mリレーで2位、男子バレーボール部は府下大会で第3位、サッカー部・男子テニス部は京都市秋季大会で準優勝という実績もあります。今回のグラウンド改修により、より一層各部活動が充実し、今後ますます、一人ひとりが輝く学校であり続けていきたいと考えます。

“園内清掃”
～めざせ！きらきら・ぴかぴかようちえん～

附属幼稚園副園長　斎　藤　真由美

本園には、毎月1回、年長児と保護者が力を合わせて幼稚園をきれいにする“園内清掃”という行事があります。保護者の方は“園内清掃”当番になる月を年に1回決めます。年長児は、親が当番をする月に、自分も当番となるのですが、親とは違う保護者とペアを組みます。

窓ガラス拭き

落ち葉ひろい

“園内清掃”の内容としては、木製テラス磨き・窓ガラス磨き・雑草ぬき・落ち葉拾い・プール掃除（7月）などがあります。でも、ひたすらきれいにすることだけがねらいではなく、テラス磨きは段ボール紙を使う、ガラス磨きは新聞紙を使うなど身近にあるものを使って掃除をすること、園庭の自然に触れて季節を感じること、当番同士がかかわり合うことを大切にしています。また、落ち葉拾いでは、イチョウの葉は油分が多く腐らないので肥料にならないこと、サクラの葉は肥料になることを知るなど、発見や学びも大切にしています。

“子育て支援”という点では、次のようなことをねらいとしています。

・我が子とは違う子ども（年齢・男女・性格など）とかかわることで、いろいろな思い・考え・感情に気づき子ども一人一人のいろいろな姿を受け入れる大切さに気づく
・我が子ではないことでの緊張感をもちながらも、ある意味ゆとりをもったかかわりができることで、子どもに対する自分のかかわり方を見直したり、気づいたりする機会となる
・我が子ではない子どもから、頼られたり、教えられたり、協力したりする中で喜びが感じられる
・3、4、5歳児の保護者が集うことで、同学年の保護者とは違う話し合いができる　など

では、“1月の園内清掃”を例に挙げて、もう少し詳しくお伝えします。

朝、当番の年長児と保護者が出会い、自己紹介をします。年長児は“こんな年賀状がきたらいいなあ”、保護者は“年賀状、心に残る1枚”をテーマにした話もします。ある年長児は「友だちの○ちゃんから、また一緒に遊ぼうねって言ってほしい」。ある保護者は「結婚して10年、子どもができず、赤ちゃんの写真入りの年賀状が届くと、こんな年賀状が出せたらいいなあと思っていた。そして赤ちゃんを授かった時、赤ちゃんを抱っこした写真入りの年賀状を出せて、とても嬉しかった。それからは、届く年賀状の写真を見ても、ご両親はどういう気持ちで選んだのかなあと思われる。だから、みんなの年賀状を大事にしている」と話しました。

そしてペアになり、環境教育実践センターから購入した花の苗（パンジー・デージー）を色や種類を相談して選びながらプランターに5つ植える仕事をしました。プランターを並べると、色目が少ないこの時期なので、園庭が明るく楽しい雰囲気になりました。満足感と共に、これからも見たり世話をしたりしようという思いが生まれたようでした。

仕事の後は、“ほっこり美味しいタイム”を設け、その時々に園で栽培しているものを収穫して食べるようにしています。1月は、畑のダイコンを収穫し煮つけて食べました。仕事のあと当番のみんなで食べるダイコンは、格別美味しかったようでした。ダイコンが苦手な○ちゃんもなぜか、おかわりをしていました。

こうして“園内清掃”を終えますが、翌日からそのペアで日を決めて、登園時に挨拶をしてみんなを迎える“おはよう当番”をします。すっかり仲良しになったペアの再会も楽しんでいます。

おはよう当番

このような“園内清掃”について、今年、うれしい声があがりました。「こんなに素敵な行事を“園内清掃”という名前ですましてしまうのはもったいないと思います」。そこで、サブテーマを募集することにし、9月からは、サブテーマを月毎につけることにしました。ちなみに、10月は～めざせ！きらきら・ぴかぴかようちえん～、11月は～小さな季節を楽しむ会～、1月は～クリーンピース～です。

幼稚園が計画している行事ですが、保護者の皆さんが自分たちの大切な行事として受け止め、積極的に取り組んでくださることを嬉しく思っています。

数学という自由なアートを通して

数学科准教授　横　山　知　郎

2013年度9月に数学科に着任致しました。カオスやフラクタルというものに関連する事を学んでいます。

数学というと固い印象があるかもしれませんが、実はとても自由な学問です。例えば、小学校で三角形の内角の和が180°だと習いますが、実は180°でなくても良いのです。さらに、いろいろな種類の無限があり、1+1が2でなくてもよいのです。

数学は、語学や音楽やスポーツなどと同じく、ルールを覚えるまでが大変だし、ルールを覚えても実践をしないと身に付かないし、練習を怠るとすぐ下手になってしまいます。しかし、これらを差し引いても、一生懸命に打ち込む価値があるほど、美しいです。

ガリレオ・ガリレイの言葉「自然は数学という言語で書かれている」にあるように、数学は自然科学の重要な道具です。そのため、いろんな分野からの要請で数学が進歩した側面もあり、広く交流を持って研究をする事は良い刺激になります。そこで、京都でもいろいろな方と交流を出来たらと思っております。

学生には、何かに一生懸命に努力してほしいと思っております。なぜなら、一生懸命に努力する経験によって培われた真剣さは、相手に伝わり、人生の助けとなると信じるからです。そのため、学生には、数学を通して、論理的思考と柔軟な発想のみならず、一生懸命を学んでもらえたらと願います。

それでは、よろしくお願いいたします。

学び続ける姿勢が自分を成長させる

舞鶴市立城南中学校　教諭　四　方　優　貴
（理科領域専攻　平成23年度卒業生）

「学ぶことは教師の使命である」、教師になって一番印象に残っている言葉である。初任者として教師生活をスタートさせたが、毎日の授業、学級運営など山ほどある仕事をこなしていくだけで精いっぱいであった。そのため、今持っている力量だけで授業や学級運営をこなしている自分がおり、学ぶという姿勢を忘れてしまっていた。もちろん、面白い、魅力ある授業はできず、生徒との距離を感じることが多くなった。

ある時、多くの先生に授業参観をしていただいたとき、厳しい評価をたくさんいただいた。このままではいけないと思い、自分自身を振り返った。その時、大学時代のことを思い出した。理科という教科は身のまわりに多くの教材がある。そのため、普段の生活から意識して教材として使えるものがないか生活をしていた。これを意識すれば、教材研究する時間も短縮することができ、身近なものを教材として扱えると考えた。すると、今まで意識していなかったところに教材があることばかりで、少しずつ授業にも活気が出てきた。もちろん、生徒の顔つきも変わり、学ぶ姿勢が見られるようになった。また、研究会などにも参加させてもらい、学び続けることの大切さを改めて感じることができた。

毎日が勉強である。自分自身が学び続けることが生徒の学ぶ意欲に繋がると信じている。学び続けることこそ、これからの私を成長させるだろう。

学び、よくよく遊べ。

大阪府立富田林支援学校　教諭　上　峠　泰　子
（発達障害教育専攻　平成21年度卒業生）

今の勤め先は初任からもう4年目になる。大学を卒業して、憧れて目指した支援学校であった。子どもたちへキラキラした熱い指導や思いだけで、教育活動が勤まると思っていた。

一年目、自分が思い描いていた教育活動と現場は違った。障がい特性や家庭環境など、様々なことを抱える子どもたち…なんで、この子は…マイナスばかりみていた日々。毎日体当たりすることだけ精一杯…。精一杯体当たりすればするほど、子どもにはつたわらなかった。仕事に追われ、休日も頭の中で子どもたちのことで悩み、休日も休んでいる気がしなかった。ある日先輩の先生にこう言われた。「この仕事を続けていくには、自分がまずゆったりした気持ちをもたなあかんで…。休みや仕事が終われば好きなことして、気晴らしぃなぁ。」、この言葉で私は救われた。今まで、一心不乱だった。子どもと向き合う私は、いつもギリギリの切迫詰まった、不安な表情だったことだろう…。今は、趣味を見つけ、休日を謳歌している。教師にゆとりが生まれれば、子どもへの言葉がけも変わる…私はこれが好きだけど、この子は何が好きなんだろう？もっと好きなことと周りの人を結べたら…、今好きなことが将来趣味につながったり、自分の自信につながればいいなぁーなど。そうするとクラス経営の方法も変わった。現在、笑いがたえないクラス、失敗しても大丈夫だよと思えるクラス、すべてを包み込むような温かいクラスになってきているような気がする。自分の心のゆとりをもつことを、先輩教師から学んだ。

だから、改めて言いたい。

現場は、常に厳しい。

支援学校ならではの、日々の授業は手作りで手探りの指導。毎日相担の先生と子どもの実態把握を確認し合う日々は、きっと君たちが教師になるときも変わらない。

今できること…教師になる前に…

大学生活、楽しめるものをたくさん見つけてください。楽しめる仲間を見つけてください。

自分の楽しいと思えるものや好きなものは、自分の強みです。それは、子どもたちのライフスタイルを考える上でも教師のライフスタイルが大きく影響します。学び、よくよく遊べ、後輩へ。

“自信”をつける、付けさせる一つの方法

京都教育大学名誉教授
元理学科有機化学など担当　沢　田　誠　二

退職直後、2003年4月初日からラオスの教育省へ日本国際協力機構（JICA）派遣で赴任しました。仕事はラオスの先生たちの教える力向上のお手伝い。京教で学んだことや経験が使えそうです。任期の2年と半年間、地方（せいぜい車が入れるところまでですが）を訪れ現場の先生や村人の話を聴き、子どもたちの様子を見ること、これを踏まえて現職教員の研修会をあちこちでやりました。

任期終了後、賛同者を得て「NPO - DEFC 爆弾ではなく学校を、地雷ではなく教科書！」を始めました。首都郊外で図書館、残留不発弾地域で爆弾お絵かきコンテスト、学校がない村への校舎建設をやってきました。校舎建設は資金を出して下さる個人やグループと現地の教育局や村との橋渡しです。

支援者の中に学生や若い人たちのグループ、「SIVIO」、「CHISE」、「夢追人」があります（いずれもこの言葉でネット検索可）。彼らはラオスに学校を建てることを目標とし、仲間を募り、資金を作ります。完成式やその後にもスタツアで現地を訪れ、子どもたちと目いっぱい遊びたわむれています。

支援村への入り口、SIVIOの学生たち（2010年）

ラオスの貧しさ、社会開発の遅れや教育状況の酷さはここでは述べません。逆に、現在の私たちの国はどうなんでしょう？豊かなのでしょうか？

確かに、社会基盤はハード及びソフト両面で整備され、平等を重んじた社会保障も充実し、あふれるほどものがあり、便利さと快適さを享受できるところです。一方、お金が無ければ何もできず、生存すら危うくなるところでもあります。社会システムに細かく規制され、無駄と思えるほどの大量消費に振り回される一方、何時までも満足感を得られないように飼いならされている状態です。更にこのことに気が付いていないところとも言えます。

若い人たちの進路や生活も、コースごとに細かくモデル化されています。悩みや、工夫、試してみたい冒険までお膳立てされています。個性や自発性を重んじると言いながら一方で構い過ぎられ、順応させられ小粒に育てられがちです。

これでは物足りなく感じ、これで良いのかしらと自問し、模索する若い人たちの一つの結論が、上で紹介した貧しい国への教育支援なのでしょうか。この活動は幸いまだモデル化されていませんからネ。目標が訪れたこともない国や地域の教育支援、仲間集めはネット、大学や組織の壁など全くありません。発想が自由で斬新、さまざまな方法で資金を作ります。さらに感心することは、決めた目標をやってしまう実行力です。

・子どもたちの夢と可能性を広げてやることができた。
・ひとを笑顔にすることがこんなに素敵なこととわかった。
・自分が変わりたいと思い、変わることができた。

活動報告会での代表の挨拶です。小さいころから引っ込みがちで人付き合いが苦手だった彼女は、この活動（街頭募金から現地訪問まで）を通じて得たことを話したのです。

教育はどこの国、いずれの地域でも、また何時の時代でも、その社会や地域が継続・発展するための一番大切な基本です。このために必要な条件は、若い世代に学ぶ場を保証すること、これに加え〝やれた！〟という達成感を与えることです。社会開発が遅れた山国のラオスにあっても、私たちのかなり発展したところでも同じです。これを得た若者は、いずれ更に何かをやってくれるでしょう。

最近、小さいながら奨学金を始めました。限られた将来しか描けない子どもたちに、もう少し大きい夢を持たせたいものです。私の夢も未だ続きそうです。

地方視察の筆者、背景は中学校の教室（2005年）

http://ameblo.jp/higechobitsubuyaki/
近著「アヘンさよなら、学校こんにちは」晃洋書房

第 133 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。
より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。
広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学総務・企画課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail：kouhou@kyokyo-u.ac.jp

133 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 133 号をお届けいたします。本号の特集は『Kyo² の魅力を発信する　京都教育大学の広報活動』と『6 年制教員養成高度化コースが発足します』の二本立てです。

1 つ目の特集では本学の広報活動について取り上げました。本学では平成 25 年度より広報担当の学長補佐を配置し、これまでの広報活動の見直しや新たな試みの検討を行っています。「広報誌」である本誌も大学の様々な活動について広く情報発信し、ますますパワーアップしてお届けできるよう取り組んでまいります。

また、2 つ目の特集では、平成 26 年 4 月より新設される「6 年制教員養成高度化コース」について紹介しています。より高度な資質・能力を身につけた教員の養成を目指し、決意新たに新年度のスタートをきりたいと思います。

今号の表紙を飾るのは附属特別支援学校の川上雄大さんの作品、裏表紙は同じく附属特別支援学校の本田桃子さんの作品です。楽しく描いている姿が目に浮かぶような 2 つの作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長　細川　友秀

京都教育大学

地域連携・広報委員会

委 員 長	細川　友秀				
副委員長	丹下　裕史				
委　　員	濵田　麻里	齋藤　正治	西村佐彩子	吉江　　崇	相澤　雅文
	平井　恭子	Andrew Obermeier	丸山　啓史	佐藤　忠司	
事務担当	総務・企画課				

京都教育大学広報 第133号

発行日
2014年３月14日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
http://www.kyokyo-u.ac.jp/